

課題に取り組み、ライフを充実させる学生が成長

京都大学高等教育研究開発推進センター 溝上慎一准教授

現代の大学生がどんな将来の見通しの下で、どのような日常生活を送っているかを見ることは、高校の進路指導で様々な示唆を与えてくれる。今号では、大学生の研究を精力的に行っている、京都大学高等教育研究開発推進センター 溝上慎一准教授による「学校教育を通して何を育てているのか」と題した講演録をお届けする。

大学の入り口で問われる 学び続ける姿勢・態度

京都大学の溝上です。私は「学生の学びと成長」をテーマに研究を進めています。昨今の大学では学生にたくさん勉強させますので、それが本当に学生の成長につながるのか、学生の何が育っているのか、逆に勉強していない学生でもやっていけるのか、そのあたりに関心を持ち続けています。

最初にお話しておきたいのは、やはり「大学受験は大事だ」と思うことです。京大で学生を15年見てください。それでわかったのは、他大学の学生と比較して、「適応

する力」が全く違うことです。それは目の前の課題に対して取り組み姿勢に顕著に現れます。京大生は多少、いい加減にやっていますが、最後は何とか仕上げてくる。これが大学受験だけの成果だとは言えないでしょうが、その影響は大きいと思います。学生は受験を通して、競争とかプレッシャー、日常生活のマネジメントなどに打ち勝てきます。大学受験の経験はとて

も活きていると見えます。他方で難しいのは、今の時代、それだけでは十分ではないということ。京大でも東大でも早稲田でもどこでもそうですが、そうした大学に入ったら、それで人生

安泰という時代ではなくなっています。どういう学生としてやっていくかが問われています。

良い学生は、課題で面白いと思っただことに対して、授業後に参考図書を読んだり、友達と議論したり、質問に来たりします。

難しいのは、自分がなぜ大学にいるのかよくわかっていない学生です。漠然と授業を受けるだけだったり、大学生活をエンジョイしたいただけだったり、良い大学に入ったから将来は安泰だと思っていたりするような学生です。彼らは伸びません。どんなに受験で頑張ったといっても、私たちから見ればまだまだこれからです。それで学

ルがありました。学校教育はその中であって、近代社会、産業界で必要とされる知識・技能・態度を子どもや若者に教える場として機能してました。若者は高校よりは大学へ、大学のなかでも二流よりは一流の大学へと進学し、大人社会に自分を合わせてそこに入っていく「アウトサイド・イン」の生き方をしました。(図①)。

ところが1980年代になると、日本は様々な意味で西欧の先進諸国にそれなりに追いつきました。モデルが無くなったときに、独自



溝上慎一 京都大学高等教育研究開発推進センター准教授

1970年福岡県生。96年大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了。96年京都大学高等教育研究開発推進センター(現・高等教育研究開発推進センター)助手、講師を経て、03年より現職『現代大学論』ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる』(NHKブックス)、『自己形成の心理学』他者の森を駆け抜けて自己になる』(世界思想社)など著書多数。

の創造性豊かな、積極的な若者を、どうやって育てていくのか、教育界には大きな課題が突きつけられました。学校教育の転換点です。

こうした時代では、学生は、自分目標を何にするのか、今やっていることにはどういう意味があるのか、頻繁に考えることが求められます。こうした時代の生き方は「インサイド・アウト」、つまり自分の内側でつくられたものを外に出しながら生きていく生き方だと見え(図②)、1990年代以降一気に私たちを見せました。

バブル経済の崩壊を機に、日本のとくに大企業では、いわゆる日本の伝統的雇用形態と言われる終身雇用・年功序列制がうまく機能しなくなりました。他方若者はインサイド・アウトで生きていくので、やる気のある人はどんどん転職しようとしています。社員の意識においても流動性が高まっています。一般的に大卒者の新卒3年目での離職率は3割ですが、私はこれはそんなに悪くない数字だと思います。企業ごとに見れば離職率4割以上のところもあれば、5%程度に留まっているところもあります。むしろ今は、企業が若手社員にとつ

目標実現に不可欠な 日常生活のマネジメント

キャリア形成を考えると、私は「二つのライフ」を見ていくことが大切だと考えています。ライフには「人生」という意味と「日常生活」という二つの意味があります。「人生としてのライフ」は進路選択や生き方、将来展望など、時間軸に基づく人生設計を立てることです。一方、「日常生活としてのライフ」は、学業やクラブ・

ぶことが終わったかのような気分になっているのですから、それが成長しようがありません。

インサイド・アウトは 不透明な時代が背景

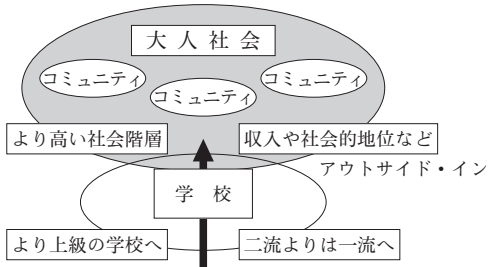
今、高校でも大学でも「キャリア教育」が盛んに行われています。大学の場合、かつての就職課が今はキャリア支援センターになっています。人生のキャリアを考えさせることを謳っていますが、実際には就職指導になっているところが少なくありません。大学生の進路を見ると、ほとんどが大学に残るわけではなく民間企業や公務員、教員などへ就職します。ですから、単なる就職支援ではなくて、大学教育全体が広い意味で、彼らの人生につながっていくような場とならなければいけない。これが私のイメージするキャリア教育であり、大学教育の目指すべき目標です。

こうした背景には、若者たちが入っていく大人社会が、かつてないほど不透明、不確かな特徴を持っていることを指摘できます。日本は明治以来の近代化の過程で、どこへ向かえばいいかのモデ

サークル活動、アルバイト、ボランティア、趣味といった大学生生活全般を意味します。大学生のキャリア形成においては、この二つのライフがうまくバランスを取ることが重要になります。

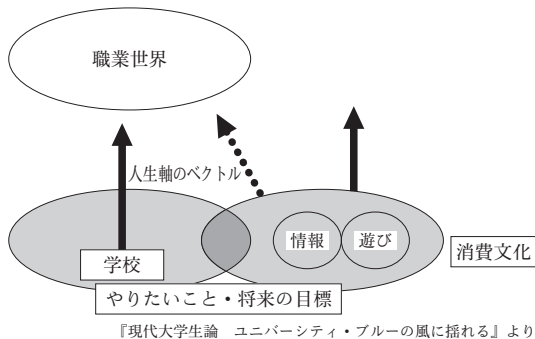
「人生としてのライフ」を考えると、将来、何をやりたいのか」という認識形成です。その点で最近の学生を見てみると、けっこう将来のことはまじめに考えている。高校の取り組みが変わってきた、良い進路指導を受けていると実感する瞬間です。京大でも入学直後の一回生にオ

図1 1960年代青年の生き方
ダイナミックス(アウトサイド・イン)



(注)「学校」が「大人社会」の円に片足を踏み入れているのは、「より上級の学校へ」「二流よりは一流へ」といった条件を満たす学校に入ることが、かなりの部分より高い社会階層の「大人社会」に参入できる可能性を決定しているからである。

図2 1990年代以降の現代青年の生き方
ダイナミックス(インサイド・アウト)



『現代大学生論 ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる』より

関与していると考えられるようになっていきます。

**卒業後に生きていく
学校教育での学び**

学校教育を通して身につけた能力や技能が、実社会でどう活かせるのか、私は産業界との接続にも関心を持っています。本日の講演の最後に、全日本空輸（全日空）との共同研究から見えてきたことを紹介して、締めくくります。

全日空は事務、営業、顧客サービス、整備など各種部門があり、文系・理系のあらゆる職種がグループ全体にあります。大学教育の成果を幅広く検討できる企業です。

例えば客室乗務員を見ると、それは決められたマニュアルに沿ってなされています。しかし国内線と国際線では飛行機の大きさや客室数、スタッフ数が全く違います。業務内容は同一でも、場面に応じてのかなり柔軟な対応が求められます。日々、「これまでの業務はどうだったか」「なぜ自分はあれがでなかったのか」と、自己への反省と改善が常に問われ、そうした問題意識の有無でその後の成長が大きく分かれてきます。

国際線のファーストクラスでは、語学力だけでなく、相手の国の文化や歴史を踏まえた接客が求められることも少なからずあり、「もっとと学校で勉強しておけばよかった」という声も聞かれます。高校や大学での勉強が垣間見える瞬間です。運航整備士の業務は安全な飛行機の提供ですが、ある整備士は「これが非常に難しい」と言っていました。この人は大学時代に熱力学を勉強してきたそうですが「大学での授業の際に『なぜそうなるのか、なぜこれが必要になるのか』を常に自問自答しながら勉強してきた。航空機の不具合にも『何で?』と問う姿勢が常に問われる」「チームワークや人の和を大切に、その中でコミュニケーション能力をつけたり、整備に限らず、幅広いアンテナを貼り、幅を広げて勉強したりしていくのが重要」と言っていました。

彼はどのような目的意識や着眼点を持って課題に取り組むべきか、そのプロセスが重要であると言っているのです。こうした考え方や取り組む姿勢は、働くようになってからなかなか身につくものではありません。大学までの勉強や課

題に取り組む中で、少しずつ身につけていくものだからです。学校教育での勉強を、受験も含めて、侮ってはいけません。

最後に、会社の将来を左右する、「企画」の仕事についても触れておきます。例えば全日空の企画室の業務の一つに「機材更新計画」があります。機材の購入にあたって、中期的な経営計画や整備士、パイロットの養成、機体の安全性・経済性など、多角的に検討していくところが必要です。さらに国内線、国際線の重要予測、あるいは他社との競争を踏まえてのコストダウンを図るなど、市場の動向を前提とした経営計画も求められます。

どちらかと言えば、客室乗務員や運航整備士の仕事は「答えのあるところ」にどうやって自分を合わせる「企画」という仕事でしたが、企画の仕事は「答え」がありません。正しいと思った結果が、失敗であることも頻繁にあります。しかし、考えられる様々な要因や条件を前提に、ある推論をしたり考えをまとめたりする作業は、何かしら大学での勉強と似ていますね。仕事には多かれ少なかれマニュアルや答えのある仕事と、答えのない

し、それは程度の問題で、何をやらなければならないか自分なりのデザインを描きながら、糧になるような友人との交遊も含めて、日常生活をアクティブに過ごす姿勢は、この時代求められていると思います。

図4は大学生生活の過ごし方から見た学生タイプ(クラスター分析・Ward法)です。注目すべきはグループ3です。彼らは自主学習や読書をしっかりとやり、他方でテレビやゲーム、友人とのつきあいやクラブ・サークル活動、もちろん授業や授業で課される宿題や課題も含めて、何でも積極的にやっているとHigh Performerな学生たちです。大学生生活の充実感については、昔風の体育会系、サークル活動に力を入れていたグループ4と大差ありませんが、思考力やリーダーシップなど技能や態度の成長を実感しているのはグループ3のほうです。ここに私は現代版の大学生の適応があると見ます。勉強もしっかりとし、課外活動や友人関係など、勉強以外のことも思う存分やる。そのなかで時間のやりくり、マネジメント能力も磨く。こうしたHigh Performance、タイムマネジメントが「学生の成長」に深く

図3 将来への見通しの実現への理解と実行 (見通しを持っている者)

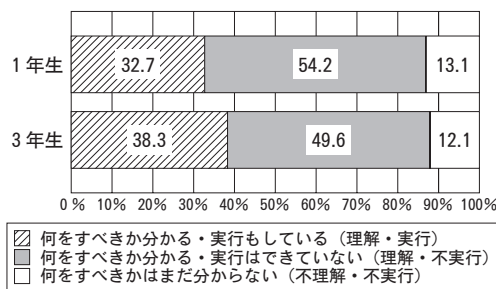
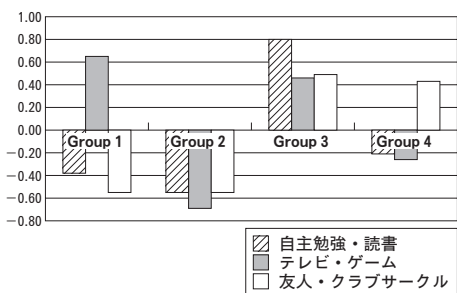


図4 大学生生活の過ごし方から見た学生タイプ(クラスター分析・Ward法)



注1 図3・図4のデータは『大学生のキャリア意識調査2007』(京都大学高等教育研究開発推進センター・電通育英会共催)より。
 注2 被験者は1年生988人、3年生1025人、計N=2013である。
 注3 図4はグループ1(N=317)、グループ2(N=672)、グループ3(N=533)、グループ4(N=442)、である。クラスター分析の結果ではグループ5(N=49)が存在するが、度数が少なく、話を簡単にするべく図から削除している。

え、それは程度の問題で、何をやらなければならないか自分なりのデザインを描きながら、糧になるような友人との交遊も含めて、日常生活をアクティブに過ごす姿勢は、この時代求められていると思います。

図4は大学生生活の過ごし方から見た学生タイプを分析したものです。注目すべきはグループ3です。彼らは自主学習や読書をしっかりとやり、他方でテレビやゲーム、友人とのつきあいやクラブ・サークル活動、もちろん授業や授業で課される宿題や課題も含めて、何でも積極的にやっているとHigh Performerな学生たちです。大学生生活の充実感については、昔風の体育会系、サークル活動に力を入れていたグループ4と大差ありませんが、思考力やリーダーシップなど技能や態度の成長を実感しているのはグループ3のほうです。ここに私は現代版の大学生の適応があると見ます。勉強もしっかりとし、課外活動や友人関係など、勉強以外のことも思う存分やる。そのなかで時間のやりくり、マネジメント能力も磨く。こうしたHigh Performance、タイムマネジメントが「学生の成長」に深く

え、それは程度の問題で、何をやらなければならないか自分なりのデザインを描きながら、糧になるような友人との交遊も含めて、日常生活をアクティブに過ごす姿勢は、この時代求められていると思います。

図4は大学生生活の過ごし方から見た学生タイプを分析したものです。注目すべきはグループ3です。彼らは自主学習や読書をしっかりとやり、他方でテレビやゲーム、友人とのつきあいやクラブ・サークル活動、もちろん授業や授業で課される宿題や課題も含めて、何でも積極的にやっているとHigh Performerな学生たちです。大学生生活の充実感については、昔風の体育会系、サークル活動に力を入れていたグループ4と大差ありませんが、思考力やリーダーシップなど技能や態度の成長を実感しているのはグループ3のほうです。ここに私は現代版の大学生の適応があると見ます。勉強もしっかりとし、課外活動や友人関係など、勉強以外のことも思う存分やる。そのなかで時間のやりくり、マネジメント能力も磨く。こうしたHigh Performance、タイムマネジメントが「学生の成長」に深く